

夕日の海

高野 桜

—
「なあ、いつまで黙ってるんだよ」

英二は夕日で赤く染まった海を見つめながら呟いた。

「う、うん——」

美香は英二の横で赤く揺らぐ波を眺めながら、俯いた。

優しく肌を撫でるような風が、ほんのりと海の香りを運び、美香の鼻をくすぐった。

英二をここに呼び出したのは美香であった。

二人が初めて出会ったこの場所に。

その時も今日のように、太陽は大きく、海はきらきらと輝きを放つ赤いワインのようであった。

美香は内気な女の子だった。

小学校、中学となかなかクラスの和に馴染めず、一人ぽつんと佇んでいた。

それは高校に進学しても変わらなかった。

いや、彼女自身変わりがたくなかった。

独りで物思いに耽り、あれこれと妄想するのが好きだったからだ。

ある時はとある城のお姫様になったり、ある時はモンスターを倒す果敢な勇者になってみたりと。

いつも休憩時間になると教室の窓から景色を眺め、物思いに耽る変わり者の彼女に、クラスの生徒達は冷ややかな目で見ているが、やがて彼女の存在すら忘れてしまうかのように気にしなくなっていた。

身長も高くはなく女の子としては普通。スタイルもさほど良いわけでもなく、髪も長からず短からず。顔立ちも、別段かわいいわけでも綺麗でもない。

その外見もまた、彼女の内面を鏡で写したかのようにであった。

いつものように終業のチャイムが教室内に響きわたると、生徒達は授業の束縛から解放されたごとくあわただしく席を立っていった。

暫しボーっと景色を眺めていた美香は閑散と静まり返った教室を見渡すと、机の中の教科書を鞆に詰め込み帰り支度を始めた。

校舎を出るとすっかり太陽が傾き、ほんのりと遠くの空が赤みを帯びていた。

「さてと、今日こそはボスキャラを倒すか」

呟くと美香はいつもの通り慣れた道を歩きだした。

帰ってすることといってもゲームである。ゲームは友達がいなかった彼女にとって唯一の遊び友達だった。

現在プレイしているロールプレイングの事を考えながら歩いている美香の鼻を、潮の香りがくすぐった。

気がつくといつも通る海岸沿いの道にさしかかっていた。

美香はこの道を通るのが好きで、少し遠回りになるにもかかわらずこの道を通学路にしていた。

「きれい——」

水平線に沈みかけた太陽が、きらきらと輝く海を赤く染め、まるで隙間無く敷き詰められた宝石をみているようであった。

気がつくといつも通り美香は吸い込まれるように砂浜に向かって歩いていた。

「誰かいる？」

波打ち際近くに座り込み、じっと佇む人影があった。

それが妙に気になったのだ。

歩み寄り、勇気を振り絞って口を開いた。

「あの、何をしてるんですか？」

夕日のように染まった頬を隠すように、美香は俯いた。

「海を見ているんだ。だってほら、こんなに綺麗だから」

そう呟くと学ラン姿の男の子はにっこり笑い、座りなよと自分の横の砂を叩いた。

「う、うん——」

美香は促されるままお尻を砂浜につけた。

「君も海が好きなの？」

「うん」

誰かと話すなんて、いつぐらいだろう？

話しかけた今でも緊張で胸の鼓動が高鳴っていた。

美香はやっとの事で面をあげて、男の子の顔を横目ちらりと垣間見た。

自然な黒髪は夕日の光を受けて茶色に輝き、潮風にさらさらと靡いていた。

整った凛々しい顔立ちの好青年といった印象であった。

カッコいい——素直にそう思った美香の頬は熱く火照り、すぐさま視線を落としてしまう。

「海はいいよ。でっかいし、全てを受け止めてくれる」

夕日に輝く水平線に向かって青年は満面の笑みを浮かべながら続ける。

「俺いつも独りでさ、いつもここに来て海に語ってるんだ。嫌なこと、辛かったこと、嬉しかったこと、全部ね」

「一緒だ——あたしも独り。友達なんかいないし」

青年は美香に向かって微笑んだ。

「そうか。俺なんかクラスでは全く存在感なくってさ、空気って呼ばれてる」

滑稽なあだ名を耳にした美香は、笑ってはいけないと思いつつも、こみ上げてくる笑いを押しさえきれずついに吹き出してしまった。

「ぷ、あはは」

「あ、笑ったな」

青年は砂をすくい取ると、美香の右手にさらさらと落とした。

「これでおあいこだ」

美香に向かって意地悪そうな笑みを浮かべると青年は立ち上がった。

「帰るの？」

美香は寂しそうに上目遣いで青年を見据えた。

「うん。自炊してるから」

「また——会えるかな？」

恐る恐る尋ねる美香に青年は、力強く答える。

「もちろんだ。毎日っていいほどこの時間にここにいる」

青年の言葉を聞いた瞬間、美香の表情がぱっと明るく変わる。

「あたし、上島 美香——です」

「俺は春日部 英二」

じゃあまたと軽く右手を上げると、英二は背を向けて歩きだした。

「またね」

美香は小さくなっていく大樹の背中に手を振った。

英二の姿が視界から消えると、ため息をついて、すっかり太陽が沈んでしまった水平線を眺めた。

「春日部 英二くん——か」

ほんわりとした気持ちが胸いっぱいになり、とっても幸せな気分だった。

ゲームをしている時の幸福感とは全く違う気持ちにうっとりとしながら、美香はすっかり黒くなってしまった海を眺めていた。

あの日以来、美香は毎日学校が終わることが待ち遠しくてたまらなかった。

英二と会ってはゲームの話をしたり。妄想の話をしたり。

もちろん、二人が会う場所はその砂浜だった。

英二は美香のどんなつまらない話でも聞いてくれた。

美香は気になっていた。

英二に好きな人はいるのかと。

美香はいつもの夕日を見ながら意を決して口をひらいた。

「英二は——好きな人いるの？」

言ってしまった——恥ずかしさといささかの後悔の念が胸中に渦巻き、耳たぶまで熱を帯びるほど真っ赤に火照っていた。

英二はそんな美香を包み込むような優しい笑みを向けると、ゆっくりと口を開いた。

「ああ、いるよ」

やっぱり、そうか。何の取り柄もない目立たない自分そんな人を好きになる訳がない——途端に美香の気持ちは落胆で重くなり、次第に深い悲しみがこみ上げてきた。

「俺の隣にね」

美香は我が耳を疑った。そんなはずはないと、英二の言葉をにわかに認めることができなかった。

鳩が豆鉄砲をくらったかのように、ポカーンと惚けている美香に向かって英二は繰り返した。

「だから、俺の隣にいる美香が好きだって」

英二の一言一言が美香の胸に染み渡り、やがてそれは溢れんばかりの涙に変わった。

「え、ゴメン！ やっぱり俺じゃだめだよね！？」

大きな滴を乾いた砂の上に落とす美香に驚きながら英二は美香に向かって謝罪した。

「う——うれしいの」

その言葉を聞いた英二の顔が一瞬石のように固まった。

そして何拍か後、じんわりと何とも言いがたい喜びがこみ上げてくる。

「うおおおお！」

気がつくと英二は立ち上がり、真っ赤に膨れ上がった夕日に向かって叫んでいた。

美香は英二の奇行に面くらいながらも、その大袈裟とも言える行動に、くすくすと笑みを漏らした。

それからというもの、美香は学校が終わって帰路につくと人目をはばかるように、メールをして英二と会っていた。

つきあっているなどとクラスの生徒に知れば、速攻冷やかしの的になることは目に見えていた。

休日、英二に会いに行く時は精一杯のお洒落をして出かけていた。

クラスメイトとすれ違っても、自分であることがわからないようにというこもあるが、なにより英二が喜んでくれることが美香にとって嬉しくてたまらなかった。

二人でカラオケにいったり、ゲームセンターにいったり、ファーストフード店で食事をしたりと——気がつくともまでの美香の生活を考えるとまるで別世界のように変化していた。

そして生活が変わっていくと共にいつしか、あの海岸での夕日もいつしか美香の記憶の奥底に追いやられていった。

いや、熱く、大きく、どんなことでも受け止めてくれる英二は、美香にとって真っ赤な夕日に照らされた大きな海であったのかもしれない。

そんなある日、授業を終え、帰路についた美香はいつものように英二にメールを送信した。

数分もしないうちに返信があるのであるが、今日に限ってはなかなか返信が来ない。

「どうしたんだろう——」

時計変わりに時間を確認した携帯に向かって呟く美香の胸中に、不安がこみあげる。

幾度も携帯を取り出し、時間を確認しているうちに、ついに自宅の玄関まで来てしまっていた。

どうしたんだろう——胸中に渦巻く不安は玄関のドアをいつになく重くしていた。美香はやっとのことで玄関のドアを開き、ただいまと、いつもかわらず明るい声を上げた。

「あら、今日は随分と早いのね」

玄関に入り、靴を脱ぎ始めると、キッチンから母、律子の声が聞こえた。

「うん、たまにはね。今日は疲れたからお手伝いはお休みしていい？」

こっそりとした匂いが鼻につき、キッチンから離れず会話をする母親に、揚げ物をしているのであろうと察しがついた。

暫しの沈黙の後、キッチンから少し心配気にややトーンの落ちた律子の声が響いた。

「いいけど、あまり無理しちゃだめよ」

わかったと短く答えると、美香はまっすぐ自室へと続く階段を上り、手書きで「美香」と書かれた小さな看板がかかった自室のドアを開け、中に入るやすぐさまドアにカギをかける。

美香は焦る思いで鞆から携帯を取り出し、画面を開いた。

「どうしたんだろう」

携帯の画面に写る待ち受け画面に視線を落としながら美香は呟いた。

美香は携帯をただ眺めていた。無機質に時刻だけを刻み続ける携帯は、ぽっかりと穴が開いた美香の空白の時間を刻んでいるようであった。

「何かあったのかな」

事件、事故に巻き込まれたとも限らない。そう考えるといてもたってもいられなかった。

気がつくとも美香は、携帯アドレスから英二の電話番号を探していた。

意を決して通話ボタンを押し、携帯を耳に押し当てる。

何回かのコール後に聞き慣れた声が携帯から聞こえてきた。

「美香？ ごめん、忙しいから後で」

言い終わると通話が途切れてしまった。

つー、つー、と無機質な信号音が美香の耳を打っていた。

「無事だったんだ。良かった——」

まるで自分に言い聞かせるかのように呟くと、美香は安堵感から眠気を感じ、倒れ込むようにベッドに身体を埋め、床についた。

「——」

ベッドの横の壁に貼られたアニメのキャラクター。

そのポスターは、美香が一番のお気に入りであるロボットアニメーションのキャラクターであった。

英二と出会うまでは、そのポスターに向かっておやすみと言うのが日課であったが、いつの間にかそれを忘れてしまっていた。

今は英二がいるから——そう呟くと、美香は明日会えることを願いながら瞼を閉じた。

しかし、そんな美香の気持ちとは裏腹に、英二から送られてくるメールの数は減り、電話でも忙しいからの一言で終わり、会うこともできない。

そんな日々が続いた。

「やっぱり他に好きな人できたのかな——」

自室の机の上に力無く突っ伏しながら、美香は時間を刻み続ける携帯を眺めた。

かれこれ一ヶ月も会っていない。好きな人ができたと考えてもおかしくはない状況に、美香は耐えきれずにいた。

そんなもおやもやとした気持ちを抱えたまま過ごす日々は、美香の不安を煽り、形容しがたい苦しみが胸を締め付け、まるで地獄のように思われた。

もう耐えられない——美香は顔を上げると、机に置かれた携帯を握りしめた。

そして、携帯のメール機能を開き、ひたすらボタンを叩いた。

初めて英二と出会った時のこと、告白してくれたこと、一緒に遊んだこと。

美香は今までの思いの丈を全て文字に刻み、最後に大事な話があるから明日会って欲しいと打ち込みんだ。

しかし、なかなか送信ボタンを押すことができない。

英二を信じたい、その気持ちがボタンを押すことをためらわせていた。

この苦しみから逃れるなら——美香はぐっと瞳を閉じ、携帯の送信ボタンを押した。

「別れる時もあの夕日の海だなんて——」

初めて英二と会った時のこと、告白してくれたこと、英二と過ごした楽しかった時間が美香の脳裏に甦ってくる。

すぐさま返信が届いた。

わかった。必ず行くから——英二からの返信を読みあげる美香の声は悲しみに掠れ、メールの文字は滴り落ちる涙の滴で歪んでいた。

眼前に広がる海は英二と出会った時と全く変わらず広く、その海を照らす夕日はあのときと変わらない眩しいほど赤い。

美香は顔を上げると、意を決して口を開いた。

「英二、最近あまりメールも返してくれないしさ、電話でもあたしと話すのかったるそうだし——」

言葉途中で再び俯く美香に英二は、一瞬目をやると小さく微笑んだ。

「ちょっと忙しかったんだ。悪い」

いつもと変わらない英二の言葉に、美香の中で怒りがこみ上げる。

「忙しいって、なに？ 英二、部活もしてないでしょ？」

「いや、色々とき——」

取り繕おうとする英二の言葉が、美香の怒りに油を注いだ。

「やっぱりあたしに言えないことなんでしょ？」

うーんと、唸りながら、英二は心なしか眉を寄せ、赤く滲んだ夕日を眺めていた。

その英二の様子に美香は、自分の抱えている不安が的中していたことを実感し、とてつもない悲しみが胸の奥からこみ上げてきた。

「別れましょう——」

きっと他に好きな人ができたに違いない——美香の声は掠れていた。

「残念だな——」

英二は呟くとポケットに手を入れ、中身を探った。

「受け取ってくれるかい？」

英二は美香の目の前に小さな箱を差し出した。

美香は恐る恐る英二の手に乗った小さな箱を開けるとそこには、質素ではあるが、花の模様をあしらったシルバーリングが夕日の光を受け、輝いていた。

「これって——」

「——ああ。卒業して、仕事も落ち着いたら、結婚してくれるか？」

電話も出ないし、メールも返ってこない。忙しい理由って、これを買う為にバイトしていたんだ。

返信したくてもできなかつたんだね。

本当にごめん。

理由も話せないで、どれだけ辛かつたんだろう。

なのに私は——美香は英二を信じていなかった自分にやり場のない憤り、情けなさを感じた。

「ごめん——ごめんね、英二。本当にゴメン」

美香の目から大粒の涙が溢れ、指輪を握りしめる美香の手に滴り落ちた。

「かまわないさ——」

英二は涙で濡れた美香の手を握ると、優しく唇を重ねた。

海の彼方の太陽は、仕事を終えたかのごとく姿を消し、漆黒の夜空をうっすらと赤みを帯びた空が海にとけ込んでいた。

まるで二人の愛がいつまでもこの海に残るかのように。

e n d